

論文題目 『源氏物語』の語りと表現—明石の君を中心として—

大竹明香

【論文の目次】

序

第一部 明石の君をめぐることばと神話

第一章 『源氏物語』における「みるめ」表現—明石の君を中心として—

第二章 歌語「みるめ」表現考

第三章 明石の君と衣通郎姫—松風巻における二条東の院と大堰の意味するもの—

第二部 『源氏物語』における「母」

第一章 藤壺の母呼称—母としての立場から—

第二章 『源氏物語』明石の君と「母」の空白—海幸山幸神話との比較から—

第三部 明石の君から浮舟へ

第一章 浮舟と「数ならぬ」・「身のほど」の意識—明石の君・中将の君をとおして—

第二章 浮舟と織女—明石の君との比較から—

第三章 明石の君から浮舟へ—うき舟・うき木・小町—

結

既発表論文との関連

主要参考文献一覧

使用本文一覧

【論文の要約】

研究課題は『源氏物語』の表現・構造について、壮大な物語の中から、明石の君と藤壺、浮舟をとおして、その表現世界の一端を明らかにすることを目的とするものである。

これまで指摘がなされてきたように、『源氏物語』には、漢籍や神話、和歌など、さまざまな引用が認められるが、たとえば、藤壺について語る叙述においては、后であることと関係しながら、『漢書』や『史記』などの漢籍の引用が多く、また明石の君に関する叙述には、神話的な枠組みを想起させる表現が多く見出せる。このように、源氏の子を産んだ重要な女君は、それぞれに源氏の人生と密接に関わりながら、背景となる話型が異なっているといえよう。このような話型の違いを端緒とし、『源氏物語』の構造、表現の特徴の一端を明らかにすることを目的とする。

第一部 明石の君をめぐることばと神話

第一部では、明石の君に焦点をあて、明石の君を語る叙述について考える。明石の君は源氏の子を産んだ女君であるが、阿部秋生『源氏物語研究序説』（東京大学出版会、1959年）に指摘されているとおり、作中に多く見出せるのは、「数ならぬ」や「身のほど」など、明石の君と源氏との身分的な懸隔を表わす意識である。この「数ならぬ」や「身のほど」との意識を自らの内に抱えながら、明石の君は源氏との関係における自身の立場を常に推し量り、忍耐の日々を過ごす。このような明石の君のありようを語る言葉の特徴は、「数ならぬ」や「身のほど」の他にはどのようなものがあるのか。さらには、語りの背景にどのような話型があるのか。明石の君をめぐる言葉から、表現の特徴を見定める。

第一章では『源氏物語』に用いられている歌語「みるめ」に着目し、明石の君に関して用いられている「みるめ」の語が導く言葉と表現の特徴について明らかにする。また第二章では、歌語「みるめ」について、『源氏物語』に先行する和歌や物語作品の用例を精査し、「みるめ」表現の様相を見定め、『源氏物語』における「みるめ」表現と比較する。第三章では、明石の君を語る叙述の中から松風巻に焦点をあて、神話と枠組みと『源氏物語』について検討をくわえる。

第二部 『源氏物語』における「母」

第二部では、源氏の子を産んだ女君たち、すなわち、源氏の子の「母」について考察する。とりわけ、母呼称については、池田節子『源氏物語』における母の存在感―「母」呼称を中心として―（『源氏物語の表現と儀礼』翰林書房、2020年）に、作中、さほど多く用いられているものではないとの指摘があるが、ひとりひとりの作中人物に用いられる場面やその特徴についての言及はほとんどなく、検討の余地は多い。本論では、源氏の栄華に大きく関わる、冷泉帝と明石の中宮を産んだ藤壺の宮と明石の君についての母呼称から、二人の女君を語る文脈の特徴と、どのような「母」の姿が語られているのかについて、検討をくわえる。

第一章では、明石の君に用いられる「母」呼称から、明石の君の母としてのありようについて、とりわけ、子を養育する「母」の姿から切り離される明石の君と、神話の枠組みからの影響について考察する。また第二章では、藤壺の宮に用いられている「母」呼称について、藤壺の母としての役割と政治との関係について言及する。

第三部 明石の君から浮舟へ

第三部では、明石の君と浮舟に共通して見受けられる言葉に着目し、これまで先行研究においてあまり比較がなされてこなかった、明石の君と浮舟について検討をくわえる。第一章では、明石の君の人物造型に大きく関わる「数ならぬ」や「身のほど」の語が、浮舟に関する叙述においてはどのように用いられ、機能しているのか。男君との身分の差を二人の女君はどのように推し量り、克服ないしは身の処し方を選択するのか。鍵語が表出するものは何

かを明らかにし、『源氏物語』の表現世界の特徴を考える。さらに第二章では、七夕伝説に関する叙述が浮舟と明石の君に見出せることに着目し、二人の女君に関する七夕表現から、明石の君と浮舟との差異を読み解く。また第三章では、明石の君と浮舟、二人の女君にのみ用例が認められる「うき木」と「うき舟」という歌語について、「浮く」と「憂し」との語に注目しながら、二人の女君が置かれる境遇や情景を探る。特に浮舟巻に語られる小野小町詠歌を引歌とする表現について、浮舟の心情と、浮遊していく女君とのイメージが作中においてどのように形成されているのか詳しく検討する。明石の君と浮舟にとって川は身近にあるものであり、源氏や薫、匂宮といった男君との関わりから、川は重要な意味を有している。二人の女君に共通する言葉の配され方について考察し、時には響き合いながら異なる生き方を与えられているそのあり方についての検討をくわえる。

以上述べてきたように、各章では『源氏物語』の叙述にある言葉に着目し、語りや表現世界について、その特徴について考察を進めることを目的とするものである。